Vol.2015-IFAT-118 No.1
Vol.2015-DD-97 No.1
2015/3/30

異文化交流スキルを有する女性起業家に関する研究

大野邦夫*, 渡部美紀子**, 西口美津子***, 末永早夏****

将来のネットワーク社会における女性の起業スキルの育成について、異文化交流の視点を含めて検討している。これまでの検討を通じて、地域コミュニティで活躍が期待される社会的な起業家として要求されるスキルとして基礎学力、挑戦力、科学的思考、経済的知識、語学力、執筆力、情報発信力の7項目を抽出した。これらのスキルとライフワークを関係付ける意味で、エドガー・シャインが提案したキャリア・アンカーを軸に、起業家が育成されるプロセスを分析し、それを総合したモデルを提案した。さらに事例研究として、福島県のいわき市におけるフェアートレード分野で活動する具体的な起業家に対して上記の分析を適用して検証を試みた。製造業からサービス業に移行する社会的な背景の下で、そのような変化に適合する人材が重要である。検証を通じて、社会変化に貢献する異文化交流者と起業家に共通する社会的性格として、デイヴィッド・リースマンの孤独な群衆における自律型が適合すると考えられた。さらにリースマンが指摘する内部指向から他人指向への推移が進展する現代社会における女性起業家特有の問題について検討したモデルを対象に考察し、最後に今後の女性起業家育成のための方針やカリキュラムについての検討を試みた。

A Study on the Woman Entrepreneurs with Intercultural Communication Skills

Kunio OHNO*, Mikiko WATABE**, Mitsuko NISHIGUCHI***, Sayaka SUENAGA****

This paper describes the requirement to develop the skills for woman entrepreneurs in future network society. Based on the previous research, skills of basic knowledge, independent spirit, scientific thinking, economical knowledge, foreign language, writing power, and information origination should be required as entrepreneurs to design and activate communities around them. Analysis to develop the skills has been tried through Edgar Shein's career anchors, and a career development model for entrepreneurs has been considered. Practical surveys have also been conducted in the fair trading business area by a woman entrepreneurs at Iwaki−city in Fukushima Prefecture. Common skills required for both inter cultural communication and entrepreneurship were investigated. The autonomous social character described in "The Lonely Crowd" written by David Riesman seems to explain the situation. Social entrepreneurs status quo require the skills of autonomous social character in the changing world from internal directed to other directed defined by Riesman. Finally, some idea of policy and curriculum for woman entrepreneurs have been discussed.

1. はじめに

現状の日本は、少子高齢化、産業構造の変化、製造拠点の海外移転、省エネ省資源、国家財政の赤字などの深刻な問題を抱えている。これら問題の解決には経済成長が必要と考えられるが、その見通しは明確ではない。この状況は先進国に共通な構造的な不況であり、この問題の一般論的な解決方法は不明確である。一般論としての解決法が期待できないのであれば、特殊解としての個別の解に挑戦していかざるを得ないであろう。そのような特殊解を創造し得る起業家のような社会的人材の育成が最も期待できる解決法ではないかと考え、そのための要件、手法などを検討している。

以上のような問題を解決し得る人材の要件については既に部分的な検討を試みた。省資源、省エネルギの問題については、画像電子学会[1]、情報処理学会[2]の研究報告に基づきハノイ工科大学で開催されたエコマテリアル国際会議で発表した[3]。地域コミュニティ再生の観点での人材育成については情報処理学会[4]、画像電子学会のワークショップ[5]で報告した。一応の結論としては、地域サービスにICTを活用する個別分野のスペシャリストと地域コミュニティを指向して活動する挑戦的な精神を持ったジェネラリストが必要である。さらにエドガーシャインのキャリアアンカーとしては、TF: Technical/Functional competence、AU: Autonomy/Independence、EC: Entrepreneurial Creativity、SV: Service/Dedication to a cause、CH: Pure Challengeが適合することを述べた[6]。

人材育成として特に検討を要するのは、挑戦的なジェネラリストである。個別分野のスペシャリストの育成は、今日の高等教育機関の専門課程がその目的のために存在し、

* 職業能力開発総合大学校
Polytechnic University
** 千葉商科大学
Chiba University of Commerce
*** 福島工業高等専門学校
Fukushima National College of Technology
**** 株式会社ethicafe
ethicafe Co., Ltd.

ⓒ 2015 Information Processing Society of Japan

その課程における教育・訓練の問題に還元されると思われる。他方、挑戦的なジェネラリストに関しては、一般論を語るのは難しく、歴史的な人物の分析を試みている。挑戦的なジェネラリストの例としては、社会を変革した人物を採り上げて共通のスキルの抽出を試みた。そのような人物の例として、米国の独立戦争に関わりその建国の祖の一人であるベンジャミンフランクリンと、日本の明治維新に関わり近代国家として出発した日本の啓蒙と教育に携わった福澤諭吉をマトリックス履歴書を用いて分析した。その結果、共通のスキルとして、基礎学力、独立心、科学的思考、経済的知識、外国語、執筆力、情報発信力の7項目を抽出した。

さらに明治維新後の日本の女性起業家として、津田英学塾の創設者である津田梅子と滝野川学園の創設者である石井筆子を採り上げ、マトリックス履歴書を用いて分析した。その結果、フランクリンと福澤の分析結果の7項目が彼女たちにも当てはまることが判明した。さらにシャインのキャリアアンカーを当てはめると、当初は、TF、AU、EC、CHの挑戦的なジェネラリストの資質にほぼ適合するが、晩年はGM: General Managerial competence、SE: Security/Stability、SV: Service/Dedication to a cause、LS:Lifestyleといった資質に移行することがマトリックス履歴書から読み取れた。

以上の結果を、被災地における女性起業家の育成に結び付けたいと考えるが、その間隙を論理的に考察するには距離が大きすぎる。その距離を埋めるためには状況を具体的に絞り込む必要がある。そこで今回は、この問題を異文化交流という観点から考察することにした。

2. 起業家と異文化交流者

2.1 起業家に必要とされるスキル

今後の日本における起業家は、従来の大企業の分社や処遇のための子会社的な経営者とは異なり、米国のシリコンバレー的な人材が期待される。マイクロソフトのビル・ゲイツ、アップルのスティーブ・ジョブズ、グーグルのセルゲイ・プリンやラリー・ペイジといった人物像が思い浮かぶ。日本でもアスキーの西和彦やジャストシステムの浮川ご夫妻は、大企業の人事異動で起業家になった人たちとは異質な人材である。西さんや浮川さんのような起業家を継続して輩出することが出来なかった日本の企業人材育成文化の問題である。

今後のネットワーク社会で、シリコンバレー的な起業家人材を育成するにはどうすれば良いかが課題であるが、この問題は、先に述べた社会変革人材の要件、基礎学力、挑戦力、科学的思考、経済的知識、語学力、執筆力、情報発信力がヒントになると思われる。

基礎学力は、受験秀才ではなく、いわゆる地頭の良さに基づく聡明さである。挑戦力は、終身雇用の組織に身を置くのではなく、新たな可能性を求めて挑戦することである。科学的思考は、物理や数学の成績が良いというよりは、事実に基づき論理的に判断し、実践する能力である。経済的知識は、市場や利用者ニーズの認識・把握が起業家にとって重要な資質であることから要求される。顧客に価値を提供する手段の枠組みがビジネスモデルであり、起業における経済的な知識に基づくと言える。

語学力は世界とつながるために必要である。ネットワーク社会はグローバルな枠組みとなるので英語のスキルは必須である。さらに近隣諸国との人事交流やオフショア開発を考えると、その現地の外国語を習得しておくことが期待される。執筆力も多くの人から抜きんでるために必要とされる。技術変化、市場変化に追随する俊敏な経営が必要なので、自分で文章を執筆し、情報発信することが要求される。技術力を誇示し市場でのプレゼンスを高めるためにも素人分かりの良い執筆力が必要である。情報発信力は、起業家としては必須の能力である。企業としての価値や優位性のメッセージを市場や公的な場に発信する必要がある。そのための媒体や人脈を確保し拡大していくことが必要である。

以上のスキルをバランス良く持つことが期待されるが、互いに補い合うような仲間で起業する方法も考えられる。アップルコンピュータの設立の際のスティーブ・ジョブズとスティーブ・ウォズニアックの例などが仲間で企業を立ち上げた例として挙げられるかもしれないが、経営的なジョブズと専門技術のウォズニアックという見方をすると必ずしも当てはまらない。共同で企業を立ち上げた例をいくつか見ているが、スキルを分担するというよりは、中心的な起業家の弱点を補うという関係の方が一般的である。

2.2 異文化交流者としての起業家

今後の世界はグローバル社会であり、人・物・カネ・情報が国境を越えて付加価値を生み出すことになる。とは言え、国境を越えても文化の壁が存在する。文化の障壁は、地政学的要因、宗教的要因、歴史的要因などに起因し、文化人類学や社会学を背景とした知識が要求されるが、専門的な知識と言うよりは、一般教養程度の常識に基づく自由な発想であろう。要するにITスキルを背景にした現代版のリベラルアーツと言えるであろう。

グローバル人材として活躍する起業家は、このような文化の障壁に柔軟に対処する必要がある。福澤とフランクリンは、日米における黎明期の異文化交流者であった。津田梅子と石井筆子も、近代国家として日本が誕生した後の異文化交流を経験した女性起業家であった。さらに日本における工業化時代の優れた資質の起業家として、高崎達之助を分析したが、共産圏の政治家と親しく交流した彼も卓越した異文化交流者であった[7]。

異文化交流のための人材育成法が検討されることが望まれる。多民族国家であれば、生活そのものが異文化交流の学びの場かもしれない。しかし日本のように韓国や中国のような近隣のへの理解すら極めて乏しい環境では異文化交流には意識的な努力が要求される。その習得すべきスキルと起業家としてのスキルの関係が興味ある課題である。それは多分図1のような関係で示されると考えられる。

異文化理解に際しては、地政学的要因、宗教的要因などに比べ、歴史的要因の情報は共有され易いと思われる。人

ⓒ 2015 Information Processing Society of Japan

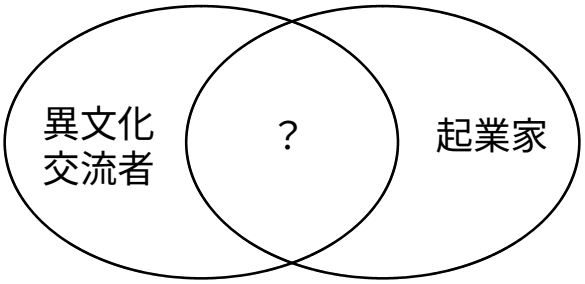

図1　異文化交流者と起業家のスキル

類の進化は、多くの地域、国家や民族にとって昔から興味あるテーマであり、多くの宗教はその疑問に答える試みであったと言える。科学的な研究を通じて、ダーウィンの進化論が受け入れられた結果、人類はほ乳類のホモサピエンスとしてアフリカで発生し、世界中に広まったことが判明した。今後人類がどのようになるかは興味ある課題であるが、その予測のためには歴史を学ぶ必要がある。未来は過去の延長として推理する以外に方法は無いと思われるからである。

国家や民族を越えた歴史の把握に挑戦した最初の人物はヘーゲルであったと思われる[8]。彼は歴史哲学を著し、歴史というものが法則を持って進化してきたことを提唱した。ヘーゲルの歴史観に対して、階級という概念を取り入れ、人類の歴史を提示したのがマルクスである[9]。マルクスの唯物史観は、技術の進歩が生産力を向上させ、それが生産関係としての経済的枠組みを規定するという思想であった。マルクスは生産関係が規定する資本主義制度の枠組みを悲観的に捉え革命による社会主義への変革を予測した。他方、資本主義による経済成長の枠組みで歴史を捉えたのは、W・W・ロストウであった[10]。ロストウは、近代国家における工業化プロセスを経済的な離陸という概念でモデル化し、非西欧国家で最初に離陸した国家として日本を挙げている。このモデルは、発展途上国の工業化を測るための的確な手法である。

デイヴィッド・リースマンは工業化を通じた社会変化を、その社会を構成する人々の性格の変化としてモデル化した[11]。リースマンは工業プロセスを近代国家における普遍的な変化と捉え、それ以前の社会的性格を伝統指向、工業化が進行中の社会的性格を内部指向、工業化後の社会的性格を他人指向と位置付けた。本稿では、異文化交流者と起業家をリースマンの社会的性格の概念を用いて分析する。

3. キャリアアンカーに基づく起業家育成のパターン

3.1 キャリアアンカー

キャリア・アンカーについては本報告の冒頭でも簡単に紹介したが、MITスローンスクールのエドガー・シャインによって提案された概念であり、個人が自分の職業を選択する際に、その背景となるモチベーションを分類したものである。これは表1に示す8つカテゴリーに大別され、一般の人はそのいずれかに当てはまることが知られている。キャリアを決定するにあたって、何かを犠牲にせねばならない場合に、どうしても諦めることができないような能力・動機・価値観であると言われる。

表1における奇数番号のTF, AU, EU, CHが挑戦的・改革的な価値観であるのに対して、偶数番号のGM,SE,SV,LSは管理的・保守的な価値観である。先に述べた社会変革者のスキルの多くは、奇数番目の挑戦的・改革的な価値観に対応する。すなわち、基礎学力(TF)、独立精神(AU, EC)、科学的思考(TF, CH)、経済的知識(TF, GM, AU, SV)、語学力(TF)、執筆力(TF)、情報発信力(TF)となるように思う。社会を変革することを志すのであるから挑戦的・改革的で当然である。

表1　キャリア・アンカーの8つのカテゴリー

No	名称	概要
1	TF: 専門的・職能別能力（Technical/Functional）	専門領域について挑戦しつづけることに生きがいを感じる。
2	GM: 経営管理能力（General Managerial）	組織の中で高い地位につき、経営管理能力を発揮する。
3	AU: 自立・独立（Autonomy/Independence）	自営業や自由業等、自立性の高い職務を選ぶ。
4	SE: 保障・安定（Security/Stability）	雇用の安定や職務の勤続等、常に安定を志向する。
5	EC: 起業家的創造性（Entrepreneurial Creativity）	失敗にもめげずに組織や企業を創造する。
6	SV: 奉仕・社会貢献（Service/Dedication）	世の中を良くすること、環境問題等に価値を見出す。
7	CH: 純粋挑戦（Pure Challenge）	困難を乗り越え挑戦したい。
8	LS: 生活様式（Lifestyle）	家族にも配慮し統合的にキャリアを構築して行く。

3.2 起業家育成のパターン

ベンジャミン・フランクリン、福澤諭吉、津田梅子、石井筆子の活動を顧みると、ほぼ下記のような経過をたどっている。

(1) 当初は専門的能力を培う（TF）
(2) 専門的能力に基づき自分の天職やライフワークとしての目標を決め挑戦する（CH）
(3) 挑戦した目標を実践を通じて具体化し起業的な取り組みとして企画・行動する（EC）
(4) 具体的に事業を起こし運営が軌道に乗った後は安定した経営を心掛ける（GM）
(5) 好調な運営が続けば、利潤追求だけではなく、社会的な貢献を目指す（SV）

成功して社会に貢献する起業家は、概略以上のような経緯を辿るように思われるので、今後のネットワーク社会でも参考になると思われる。

3.3 起業家育成モデル

以上をまとめると、図2のようなモデルが記述可能となる。

ⓒ 2015 Information Processing Society of Japan

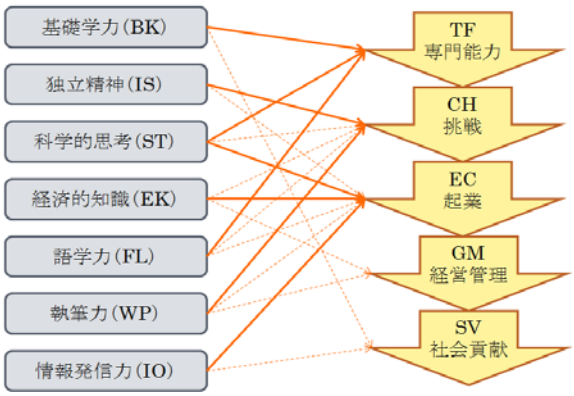

図2　起業家育成モデル

4. 福島における女性起業家の事例

4.1 フェアトレードによる起業

いわき市在住の女性起業家を紹介する。著者の一人である末永早夏は、6年前にフェアトレードの法人“ethicafe”を起業した。主な事業は、ネットショップによるコーヒー豆の販売である。結婚式の引出物としての売上も多い。ガテマラ、ルワンダ、コロンビア、メキシコなどの発展途上国のコーヒー豆やその粉をパッケージにして美しく包装して販売している。この事業における一つの特徴はフェアトレードである。フェアトレードは、文字通り公正な貿易を意味する。先進国と途上国との間の貿易は、とかく先進国に優位な形式で行われてしまいがちである。それを公正・公平な取引として実現し事業にすることをポリシーとしている。言い方を変えると不幸な人を生み出さない事業の推進である。ethicafeという企業名はそのような思想と方針に基づくコーヒー販売事業に由来している。

4.2 末永のキャリア

末永がこの事業を思い立ったのは、小学生のころにテレビで難民キャンプの映像を見て、途上国問題に関心を持つことに端を発する。そのような経緯から中学生の時に、社会科の自由課題で、国連の活動についてレポートをまとめた。その後、福島高専に入学し、海外に対する興味からコミュニケーション情報学科を選択した。高専2年の時に、英会話スクールのチラシを見てカナダに語学留学をした。9か月の留学生活の後、1学年下に復籍して3年次までを終了した。その後英国に渡航し、ウェールズの語学学校で8か月学んだ後に、イングランド・イーストアングリア大学に入学し、国際開発学部で3年間高等教育を受けた。教員の半数が1年の大半を途上国での研究にあてている環境であり、末永もペルーで4か月のNGO体験をしている。卒業して帰国後、いわき市に本社を置く車載情報機器のメーカーに就職し、海外向けのカタログ作成、モーターショーのイベント、ウェブサイト制作など様々な業務に携わり最新技術に関わるビジネスを経験した。仕事自体にやりがいはあるが企業組織の閉塞感から、大学時代に経験した途上国にかかわる仕事をしたいとのことでフェアトレードを方針とするethicafeを立ち上げた。

フェアトレードの仕事をするためには、国際認証が必要であり、法人格が必要になる。そのために書類を作り、実家を事務所にして開業した。いわき市の商工会議所で、いわき駅前の再開発を担当しているラトブ事務所のベンチャー企業支援を知り応募したところ、面接の後に採択され、再開発ビルのラトブ内にオフィスを開設した。新規事業の立ち上げの後、事業を継続するために、商品製造、営業、経理といった必要な業務を全てこなし、スキルを身につけたとのことである。

商品の製造作業のためにはコーヒー豆から 粉をひき、それをパッケージングして100個単位で箱詰め・包装を行う。経理の仕事としては、コーヒー豆やその他必要な資材の発注、顧客からの受注に伴う帳簿の整理、領収書の発行、決算などが呈上業務として必要とされる。営業としては、Webサイトの制作・更新の他、知名度を上げるためのイベントへの出店に心掛けているとのこと。今後は、本社はいわき市に置きながら、ネットを通じて全国にフェアトレードをアピールして行きたいとのことである。

4.3 末永のスキルへの考察

末永の起業家スキルとしての発端は、福島高専での英会話と簿記の実践的教育にあり、それが後々のキャリア 展開に生かされた。カナダへの留学による異文化経験が英国で の大学留学につながり、さらにペルー滞在などを通じて国際的視野を広げ、長年培った語学力の有効性が証明されている。

就職先の車載器機メーカではカタログ制作、イベン ト企画、Web企画などを担当したが、これらの仕事は顧客に向けた企業における情報発信力としての基本である。このスキルは事業立ち上げでも有効に使えるものになったが、執筆力と情報発信力に対応する。事業の立ち上げに際しては、経済的知識が必要であるが、これは高専での簿記の教育が役立ったと思われ、顧客への付加価値を明確化するビジネスモデルの構築に活用された。

ビジネスモデル的には、ネットワークを活用する集客と受発注を行うネットビジネスであり、スマホが普及したタイミングと合致している。これらのスキルは科学的思考法と基礎学力無しには実現できないであろう。さらに挑戦力を有することも明白である。この挑戦力は、フェアトレードという社会的な公正さを指向する普遍的な価値観からもたらされるものであろう。困難な状況にある発展途上国の民衆に配慮することもグローバル人材の資質である。

5. 孤独な群衆における自律型人材

5.1 D・リースマンの孤独な群衆のモデル

デイヴィッド・リースマンのモデルを要約すると、人間の社会は工業化プロセスを境界にして3種類の社会に大別され、そこで見られる社会的な性格が普遍的に表れるというものである。工業化以前は伝統指向、工業化途上は内部指向、工業化後は他人指向という性格に代表されるのである。

伝統指向が出現するのは、工業化以前の社会で、人口構成は多産多死のピラミッド型で人口は安定している。その

ⓒ 2015 Information Processing Society of Japan

ような時代は、情報伝達は主に口承によりなされ、人々の性格は伝統的な宗教により影響される。その後工業化が始まると、医療の発達で人々は長寿になる。その結果、人口構成は多産少死となり、それに伴い人口は増加する。そのような状況では、増加した人口を養うための新規産業が工業化分野で展開し、旧弊に捉われない挑戦的な性格が社会的性格となる。このような性格は内部指向と呼ばれ、自己の信念を貫くことが特徴で、ジャイロスコープに譬えられる。

さらに社会が発展し生活水準が向上すると人々は子供を沢山は産まなくなり、少産少死の成熟社会となる。そのような社会は、工業化後社会（PostIndustrialized Society）と呼ばれる。リースマンは言及していないが今日的には情報化社会と言えるであろう。テレビ放送が普及し、人々はテレビのニュースや番組から情報を得、流行を作り出す宣伝広告にも敏感になる。このような状況で、人々はマスメディアや仲間集団からの情報に敏感に反応し、自己の内部ではなく、外部の他人やマスメディアに依存する性格となる。他人指向におけるこのような性格は、内部指向のジャイロスコープに対してレーダーに譬えられる。以上をまとめると図3のように示される。

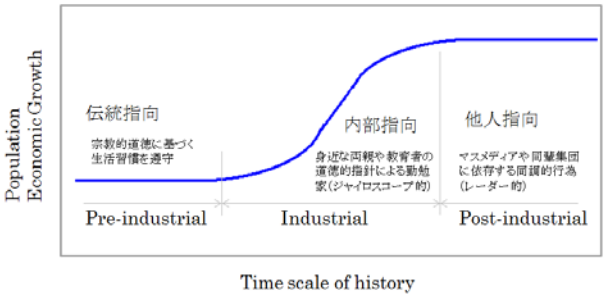

図3　孤独な群衆における社会的性格

5.2 欧米・日本・東南アジアの経済発展

欧米、日本、東南アジアにおける工業化の進展は異なっている。その概要を図4に示す。人口曲線と製剤成長は必ずしも比例する訳ではないが、孤独な群衆の観点から見ると対応すると考えて良いだろう。欧米諸国は1700年代以降の産業革命により工業化がスタートし、ロストウの表現を借りると1800年前後に離陸したと考えられる。日本は明治維新により近代国家としての枠組みが整備され、ロストウによると1890年代半ばに離陸したと言われている。東南アジアは第2次大戦後に独立国家としての枠組みが整備され、タイ、マレーシア、インドネシア、ベトナムなどは2000年前後に離陸した模様である。

各々の地域における社会的性格もその変化に依存すると考えられる。経済的な離陸の頃に、伝統指向から内部指向への社会的な性格の巨視的な変化が徐々に進行する状況があったと考えられる。

フランクリン（1705～1790）と福澤（1835～1901）は、共に伝統指向社会の人物である。彼等が人生を終えた

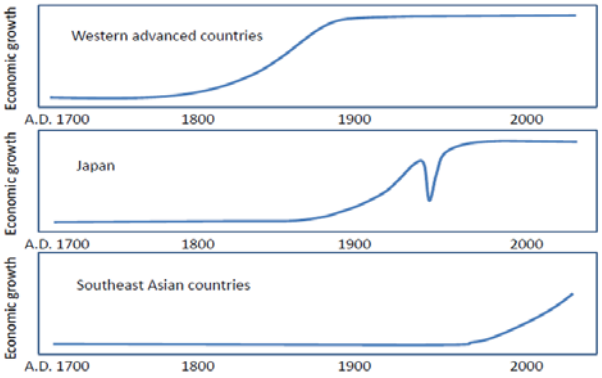

図4　欧米・日本・東南アジアの経済発展

頃に、両者の祖国である米国も日本も経済的な離陸を遂げている。津田梅子（1864～1929）と石井筆子（1861～1944）は、共に幕末に生まれ、明治・大正、昭和の初期までを生き抜いているが、内部指向初期の時代に活躍していると言える。

5.3 適応型・アノミー型・自律型

歴史的な経緯を踏まえた伝統指向、内部指向、他人指向という社会的のカテゴリに対して、所属集団や組織への適応性に応じた社会的性格というものも考えられる。リースマンはこの性格を、適応型、アノミー型、自律型というカテゴリで分類した。この社会的性格は時代とは無関係に存在する。

適応型は、所属する集団や組織に適応する性格で、単に適用可能な性格から積極的に適応する性格まで幅がある。一般の社会的に適応している人々の多くはこの性格に属する。アノミー型は、所属する集団や組織に適応出来ない性格の持ち主で、精神異常と見なされる人々や反社会的な行動を取りかねない人々である。自律型は、所属する集団や組織に適応してはいるが、問題を感じて批判的な視点を持人々である。社会の改革はこのような人々によって推進されるとリースマンは指摘する。

5.4 群衆の顔

リースマンは「孤独な群衆」の姉妹編として「群衆の顔」という著書を出版している[12][13]。この書籍は、「孤独な群衆」による社会的性格の2つの軸に基づき、多様なアメリカ人を分析しカテゴライズした。

本研究から見て特に興味深いのは、職業訓練施設における育成途上の人材の分析である。ニューヨーク州ハーレムの職業訓練校では、黒人の訓練生が以前の生活習慣を保持している状況を把握し、伝統指向として位置付けている。バーモント州ランバート職業高校では、ニューイングランドのプロテスタント的開拓者精神が生きており、内部指向として位置付けている。ロスアンゼルス郊外のサン・ガーディノの高校は、中産階級としての仕事観に基づく教育がなされており、他人指向として位置付けられている。

職業高校に通う学生達のインタビューを通じて、1950年代の米国に残存する多様な職業意識が提示されている。リースマンは、一般の公的教育や大学の高等教育よりも職

ⓒ 2015 Information Processing Society of Japan

業教育が社会を反映すると考え、職業訓練校を重点に分析したと思われるが、当時の米国の他人指向社会にも伝統指向、内部指向が存在することを示していた。

5.5 自律型人材育成の重要性

以上の職業訓練施設のインタビュー事例を含む分析を通じた孤独な群衆における社会的性格のパラダイムをまとめると表2のようになる。

表2　社会的性格の対応マップ

	伝統指向	内部指向	他人指向
適応型	宗教的道徳に基づく生活習慣を遵守	身近な両親や教育者の道徳的指針による勤勉家（ジャイロスコープ的）	マスメディアや同輩集団に依存する同調的行為（レーダー的）
アノミー型	伝統的な生活習慣に不適応な問題児	勤勉文化についていけないなまけ者の不適応者	同輩集団に仲間外れにされる落ちこぼれ的脱落者
自律型	従来の伝統や習慣を批判する社会改革者（フランクリン・福澤）	既存の忠誠・勤勉な組織への批判からの自立性を主張する改革者（津田・石井）	マスメディアや同輩集団の圧力に問題を感じ、新たな社会を指向する改革者（育成対象人材）
備考	イスラム、ラテンアメリカ、アフリカ	東南アジア、ＢＲＩＣs	欧米、日本

適応型の性格は、一般に自らが置かれた世俗の権威や権力を含む環境に従順に振る舞う。それは生物が自分の生存のために環境に適応することの人間版と言えるであろう。しかし何らかの理由でその環境に変化が生じた場合、人間は新たな環境への適応を要求される。過去の環境に過剰に適応した人間は、新たな環境への適応は却って困難になる。

自律型の性格は、そのような変化の可能性を把握し、それに対処する資質である。異文化交流者、起業家ともに社会変化、環境変化に対する対応スキルを持つ自律型の性格の人間に対応付けられる。フランクリンと福澤は、伝統指向における自律型人材であり、津田梅子と石井筆子は内部指向における自律型人材である。末永さんの場合は、勤務していた企業が内部指向的な文化であったので、その観点からは内部指向の自律型に位置付けられるが、就職した企業環境で培ったインターネット関連のスキルを上手に生かしている点に関しては他人指向的な自律型という見方も可能であろう。

6. 考察

6.1 これまでの要約

本報告では、2章で異文化交流者と従来の検討結果に基づく社会的人材としての起業家について対比し、その分析法として歴史的な観点の重要性を述べたが、D・リースマンによる社会的な性格を本研究の分析手法として採り入れることを述べた。

3章ではキャリアアンカーの考え方と社会的な起業家に期待される7項目のスキルについて述べ、この両者に基づく起業家育成モデルを提案し図2に示した。4章で今後の期待される起業家像として福島のいわき市で健闘している末永早夏さんを紹介し、先のモデルに対応付けた。

4章では、異文化交流者と起業家に要求される社会的性格をD・リースマンの孤独な群衆における分類手法を用いて分析し、内部指向、または他人指向における自律型の性格が対応すると考えた。

6.2 産業構造の変化と女性起業家

女性起業家にとっての生活環境は、もの作り文化の工業化時代とサービス文化の工業化後時代とでは大きな変化が存在する。工業化時代であれば、男性は工場やオフィスで仕事し、女性は専業主婦として家庭を守り、家事と育児や教育に当たるのが一般的であった。起業家のイメージも、独自の企業を立ち上げるよりは、大企業の業務切り出しや下請け企業としての起業家が多かったと言える。そのために女性の起業は石井筆子のように家族の協力に頼るか、津田梅子のように結婚を諦めるしかなかったと言える。

工業化後のサービス業が主流の時代になると状況が変化した。男女平等の原則から男女共同参画社会となり、女性も男性と対等に職業を持つようになったためである。その結果女性にとっての起業はものづくり文化よりは容易になったと言える。サービス業は、製造業とは異なり生活密着型であり、生活に結びついたニーズに基づく起業は女性に有利だからである。

なお、上記の変化は、孤独な群衆の歴史的な観点では、内部指向型から他人指向型への社会的性格の推移に対応すると考えられ、表2をその観点で見直すと上記の内容がより明確になるであろう。

6.3 異文化交流者と起業家

異文化交流者と起業家との対比を検討する。社会的性格としては共にリスクを厭わない「自律型」と思われるが、状況により適応型の起業家も存在するであろう。その状況を歴史的な経過を踏まえて考察を試みたい。

工業化以前、すなわち近代国家の成立以前（日本の場合は江戸時代以前）には、西欧のギルドや日本の町人文化で富を成した商人はいたが、資本主義制度における起業家とは異なるであろう。工業化以前の異文化交流者は、探検家や宗教家、貿易商人などであろう。

工業化進展時はマックスウェーバの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で取りあげられた勤勉な起業家が西欧社会における起業家のイメージである。彼等の勤勉な活動とそれを支えた思想が資本主義を形成し、その

ⓒ 2015 Information Processing Society of Japan

後の近代国家・産業国家の形成に貢献した。しかしそれは後に重商主義・帝国主義をもたらし、負の側面も持つものであった。

日本の場合を考えると国家主導の官僚や資本家が日本の資本主義を起こしたと言えるであろう。端的には官営事業の民間への払い下げである。岩崎弥太郎や古河市兵衛、安田善次郎といった人物が思い浮かぶが、彼等が財閥を形成して日本の経済的な離陸を実現し、工業化の道筋を形成したと言えるであろう。戦後の電電公社や国鉄の民営化も類似のコンテキストで考えられる。日本の起業家が国（政府）の主導で育成され社会的な地位を占めるという土壌が日本の社会体制の中に存在するように思われる。国家権力からの支持を得て活動する起業家が自律型かというと、そうではないであろう。いわゆる天下りによって地位を得たような起業家は、現状の社会の問題を批判して活動する自律型ではなく、現状の社会に迎合した人生を送る成功した適応型でしかない。工業化時代の異文化交流者は、外交官、海外事業関係者、国際的な活動を行う専門家、留学生などが対象者であろう。

工業化後の起業家は、我々の研究対象が含まれる。標準化された製品の大量生産を指向する製造業から、生活に密着した多様なサービス業における分野への移行時点における起業家が重点になるであろう。グローバル化を背景に異文化交流者も多様化せざるを得ない。多国籍企業人材や外資系企業の経験者、帰国子女、などもその範疇に含まれるであろう。

6.4 自律型人材の育成

以上の考察から、異文化交流者と起業家の関係は図5のように考えられる。

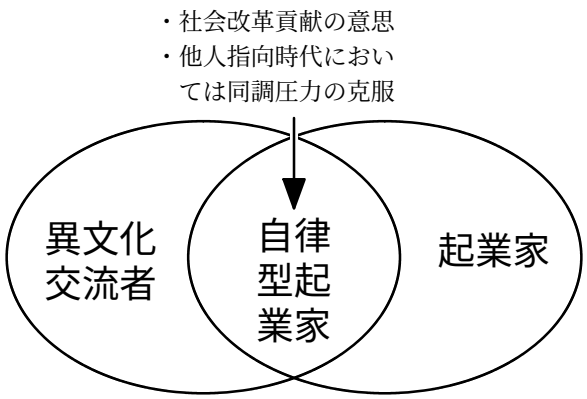

図5　異文化交流者と起業家の関係

図1の？を自律型起業家とした。これまでの研究報告で紹介してきたベンジャミンフランクリン、福澤諭吉、津田梅子、石井筆子はこのカテゴリに包含されると思われる。このカテゴリの人材に要求されるスキルを、基礎学力、挑戦力、科学的思考、経済的知識、語学力、執筆力、情報発信力と想定したが、その妥当性の検証は今後の課題である。

6.5 自律型の個人への考察

リースマンの孤独な群衆における自律型の個人に関する定義は、自分が所属する組織や社会に適応するが、その組織や社会に内在する問題を把握し、その解決を指向する個人とのことである。別の見方をすると、適応型やアノミー型の個人に比べると、自分の持っている性格と立場の余力を充分に使いこなすことができる。リースマンによると、自律型の個人でも、内部指向と他人指向ではかなり異なることが指摘されている。内部指向にける自律型は、その社会における適応型と同様にジャイロスコープによるメタファで象徴される内面化された目標を持っている。適応型との相違は、そのジャイロスコープに対するコントロール能力を有していることであり、組織や社会に対して柔軟に対処することが可能である。

他人指向における自律型は、その社会における適応型と同様に、レーダーによるメタファで象徴されるマスメディアや仲間集団からの情報に影響されるが、鋭い感受性により、自分の価値観や進むべき道を選択して行ける個人である[14]。

このような個人の教育、訓練、育成は果たして可能か否かが課題である。見方を変えると、自由な価値観に支えられる社会人としての個人の育成であり、潜在的には高等教育におけるリベラルアーツ教育に近いものであろう。

6.6 女性起業家育成のカリキュラム案

自律型の女性起業家の育成の方法論の明確化と具体的なカリキュラムの提案が本研究の目標である。方法論としては、自律型の起業家が必要とするスキル、すなわち基礎学力、独立心、科学的思考、経済的知識、外国語、執筆力、情報発信力の習得支援が一つの方向性として挙げられるであろう。このスキルは、先に述べた通り、リベラルアーツに近いものである。

(1)基礎学力

高等教育で専門のスキルを習得する前提となる一般教育的な知識や実践力のスキルである。優れた起業家は、社会人としての素養、指導力、聡明さが要求される。

(2)独立心

組織や社会の権力や権威に服従するのではなく、自己実現の観点から、その問題を把握し、それを改善するために挑戦する勇気を育む。

(3)科学的思考

数学や物理の学力を培うのではなく、事実に基づいて論理的に思考・検証し具体的な実践に結び付ける資質を養成する。

(4)経済的知識

起業に当たり企業会計、ビジネスモデル、市場の評価などの経済的な具体的な知識が必要である。とは言え学問としてでなく、事業における実践的な投資効果の感覚を身につける必要がある。無駄はいけないが必要なリスクは取らねばならない。起業はまさにそのような知識習得のOJT的な実践である。

(5)外国語

グローバル時代なので、海外の技術動向や市場動向の把握、海外人材との交流は必要であり、英語のスキルは必須である。さらに今後の発展が期待されるアジア諸国の言語の習得も期待される。

(6)執筆力

自律型の起業家は、アイデアを伝達する必要があり、そのためには文書執筆のスキルが要求される。そのためのレトリック、文書作成ツールの使用法、ブログの執筆などのスキルの習得が期待される。

(7)情報発信力

起業に当たり、自分の活動を関係者や関係市場に広く周知する必要がある。そのためのメール交換、ブログ・SNS活用、顧客管理、メディアへの対応、情報セキュリティなどのスキル習得が期待される。

6.7 ドキュメントコミュニケーション・スキル

上記の、執筆力・情報発信力に関しては、まさに当研究会が今後取り組もうとしているドキュメントコミュニケーション・スキルである。起業家育成という観点におけるドキュメントコミュニケーション・スキルは一般の文書執筆力や情報発信力とは若干異なる側面を有する。それは、起業家が必要とする別の基礎学力、挑戦力、科学的思考、経済的知識、語学力といったスキルとの連携であり、さらに視点を広げると、異文化コミュニケーションにおけるドキュメントコミュニケーション・スキルの要請ということになるであろう。

7. おわりに

以上、検討の概要を述べたが、今後の課題としては、さらにインタビューや文献を通じてデータを収集し、図2で示したモデルの妥当性を検証する。さらに6.6節で考察した自律型人材の育成の考え方を反映させた女性起業家の育成のための具体的なカリキュラムを検討する。その中で、ドキュメントコミュニケーション・スキルについては、当研究会の今後の方向性とも関連付けて取り組ませていただけると幸いである。

本報告は、異文化コミュニケーション学会2104年度年次大会での講演[15]とその際の質疑に基づいている。関係者のみなさまに感謝します。

参照情報・文献

[1] 大野邦夫, 西口美津子; ” 循環型社会に向けた人材育成とICT技術の活用に関する一考察 ” , 画像電子学会年次大会一般講演論文（2013.6）

[2] 大野邦夫, 西口美津子; “ 循環型社会に向けた人材育成とICT技術の活用に関する検討 ” , 情報処理学会研究報告, DD90−3, (2013.7)

[3] Kunio Ohno, Mitsuko Nishiguchi; “ A Study on Human Resource Development for Ecomaterial Recycling Society ” Proc. on 11th International Conference on Ecomaterial (ICEM11), P.27, (2013.11)

[4] 大野邦夫, 西口美津子; “ 地域コミュニティの再生に貢献する人材育成に関する検討 ” , 情報処理学会研究報告, DD91−2, (2013.9)

[5] 大野邦夫, 西口美津子, 渡部美紀子; “ コミュニティ指向の若手起業家の育成 ” , 画像電子学会第5回VMAワークショップ報告（2014.11）

[6] 大野邦夫, 渡部美紀子, 西口美津子; “ ネットワーク社会を目指す起業家人材育成の育成に関する検討 ” , 情報処理学会研究報告, DD94−2, (2014.7)

[7] 大野邦夫, 渡部美紀子, 西口美津子; “工業化および情報化を背景とする社会的起業家人材の育成”, 第1回画像関連学会連合会大会資料（2014.11）

[8] G・W・F・ヘーゲル（長谷川宏訳）; “歴史哲学講義（上・下）”, 岩波文庫（1994）

[9] C・マルクス, F・エンゲルス（村田他訳）; “経済学批判序言”, マルクスエンゲルス全集, 大月書店, Vol.13, pp.6−7, （1964）

[10] W・W・ロストウ（木村健康他訳）; “経済成長の諸段階”, ダイヤモンド社（1961）

[11] D・リースマン（加藤秀俊訳）; “孤独な群衆”, みすず書房, （1964）

[12] D・リースマン（國弘正雄・久保昭訳）; “群衆の顔（上）”, サイマル出版会（1968）

[13] D・リースマン（國弘正雄・久保昭訳）; “群衆の顔（下）”, サイマル出版会（1968）

[14] D・リースマン（加藤秀俊訳）; “孤独な群衆”, みすず書房, pp.243−256（1964）

[15] 大野邦夫, 渡部美紀子, 西口美津子, 末永早夏; “異文化交流スキルを有する女性起業家に関する研究”, 異文化コミュニケーション学会2104年度年次大会研究発表資料（2014）

ⓒ 2015 Information Processing Society of Japan